
白球～少年野球編～

£ 暁 £

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白球〜少年野球編〜

【Nコード】

N5965B

【作者名】

£ 暁 £

【あらすじ】

ある人との約束を果たすために少年は甲子園を目指す

プロローグ（前書き）

初投稿＆初小説です。感想をお願いします

プロローグ

今日は雲一つない青空

まるで少年の心の中見たいだ

「行つてきまゝす」

つと大声をあげて1人の少年が家を飛び出す

首から布で作ったと思われる野球ボールのアクセサリーが付けている

この少年が物語の主人公である

少年の名前は光

この間、九歳の誕生日を迎え遂にリトルリーグになれるのだ

ちなみに光の家の近くにはリトルチームが二つある

彼が向かつてる場所は地元のリトルチームの一つである

「レッジャーズ」

である

光がレッジャーズを選んだ理由は器具類が揃っているからだ。

それもあつて昨年は全国大会優勝は逃したが準優勝だった

だから少年はこのチームを選んだ

もう一つのチームは
「スカイ」

スカイのレベルはレッジャーズには劣るがなにより一人一人が楽しく練習をしている

光は弱い所に興味がなかったら強き者こそが全てだと思っていた。

だから光はレッジャーズに行った

白球〜リトルリーグ編〜

レッジャーズのコーチ

「ここがレッジャーズの練習場か」

今日は光のレッジャーズに入部する日。

いや……入部するはずだった

目の前の練習場に啞然としていると…

「入部希望者？」

つと急に話しかけられた

「は、はい!!」

思わず声が裏返る

そこには30歳後半ぐらいの人がいた

「僕はコーチの新藤だよ。よろしくね」

チビが来たな…役立たずが増えたか……

いや……直ぐに辞めるか

新藤は鼻で笑った

「光って言います。よろしく願いします」

つと言い握手した

「……………!?!」

「どうかしたんですか？」

「いや…なんでもないよ。それよりレッジャーズのシステムを説明するから中へ入ろうか」

役立たずの小さいガキだと思ったが相当練習をしているな……………豆が潰れて治って…その繰り返しで出来た豆だった

そして光は中へ案内された

会議室見たいな場所に連れて来られコーチは話した

「まず1ヶ月、レッジャーズの練習に参加してもらいます。その1ヶ月の中で光君が不満などがなかったら入部と言っ形になるから」

「1ヶ月？なんでですか？」

「辞める人が多いからね。練習が厳しいから」

僕は辞めないんだけどな絶対に……………だって

「わかりました。1ヶ月頑張ります」

「早速……………着替えて練習をやりに行こうか」

「はい!!」

「元気がいいな」

何処まで元気がいいかな？

楽しみだな

光君の実力が……

そう呟くと新藤は笑った

レジャーーズのコーチ（後書き）

文才無くすいません――。○

実力

「あれ？」

選手が少ない…… 6人ぐらいしかない

「なんか少なくありませんか？」

「ここは二軍のグラウンドだ。みんな辞めていったから少ないだ」

急に口調が変わり始めたコーチ

「いつまでも立ってないで体を温めろ」

トロトロしやがって

「すいません」

光は1人グラウンドを走りだす

すると周りから小言が聞こえた

「可哀想に……」

「ここに来たのは間違いだよ」

「あんなガキが練習について来れるはずがない」

僕をバカにしてるのかな？

自慢じゃないけど一人で頑張ってずっと練習して来たから少しは上手いと思うんだけどな

「トロトロ走ってんじゃないやねえ」

「早く走らんか！！やる気あんのか？」

コーチは二重人格か？つと光は思った

「よし10周も走れば体も暖まっただろ。」

つと言うとコーチはバットを取り出し近くにいた部員からボールを持って来るように指示する

「ノックするから来い」

「はい！わかりました」

うるさいなあ……いちいち大声だすなよ

「よし！！サードに行け」

「はいはい」

僕の実力見せてやる

光は密かに燃えた

「早く行かんか」

つと、また怒鳴りだす

「はい」

見せてやるぞ

僕の実力を……

やる気満々+自身満々でサードにつく

「行くぞ！！」

カキンつと快音を響かせ『ミサイルか！！』って言わんばかりの
スピードで球が飛んでくる

そして……

その打球に

光は……

「ちょ……無理」

打球は光の腹に突き刺さる

「ぐはっ」

つと言うと光は倒れる

するとコーチは怒鳴りだした

「ちゃんと捕らんかか!!」

だが内心は……

あれは痛いな……上手いと思ったコーチだった
光は下手くそだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5965b/>

白球～少年野球編～

2010年10月20日17時19分発行